

第7章 音楽

楽しい事なら 何でもやりたい

井上陽水「青空、ひとりきり」より

変わる福祉番組

平成二十九年一月二十三日、Eテレ『ハートネットTV』を観る。ゲストは、小田原市在住のヴァイオリニスト式町水晶^{しまちあみずき}さん、二十歳。三歳で脳性まひと診断された。四歳の時、手足のリハビリになればと母親の勧めでヴァイオリンをはじめた。

コンニャクを使って物をつかむ練習や、手と足で、ひたすらリズムをとるレッスンなど、ヴァイオリンを弾きこなす体力を養った。小学六年生の時、クラスでいじめにあった。同時期に医者から失明宣告を受けた。十五歳の時、車椅子を必要としなくなるまで体が劇的に回復し、プロへの道が開けた。その努力は想像を絶する。

司会は風間俊介さん。風間さんが、すばらしい誕生日コンサートや、ハキハキとした受け答えを見て、直接彼に向って「脳性まひ とは思えないですね」と発言した。福祉番組も新しいスタイルになっている。

◆平成三十年四月、アルバム『孤独の戦士』で念願だったメジャーデビューを果たした。十二歳の時に作曲した「孤独の戦士」は、「自分の分身のような曲」という。ヴァイオリンは東日本大地震の津波で被災した「奇跡の一本松」などから作られた「津波ヴァイオリン」。

歌とお笑いの違い

平成二十九年七月十三日、『SONGS』を観ていると、エレカシの宮本浩次（ボーカル・ギター）さんと、爆笑問題の太田光さんの対談があった。

太田さんが、「歌とお笑いの違いは、歌は聴けば聴く程よくなる。お笑いは、一回聴けば、次はネタバレになる。二回はやれない」と言った。

私は、それは違うと思った。太田さんが言う「お笑い」は、コンビを組んでやる「漫才」の事だろうが、「落語」はどうか。「落語」も「お笑い」だ。古典落語の「じゅげむ」「まんじゅうこわい」「時蕎麦」「藪入り」は、子どもも大人も何回聴いても楽しい。

◆「エレファントカシマシ（エレカシ）」は、日本の四人組ロックバンド。昭和五十六年（一九八一年）結成。ヒット曲「明日に向かって走れ」「はじまりは今」「夢のかげら」ほか。

かなで 金手のオザワ

指揮者の小澤征爾さんは、平成二十一年（二〇〇九年）十二月に人間ドックで食道癌が見つかった。翌年、食道全摘出手術は成功。

平成二十五年（二〇一三年）四月、吉田秀和の後任として水戸芸術館館長に就任。八・九月、『サイトウ・キネン・フェスティバル松本』で「こどもと魔法」（ラヴェル作曲）、「ラプソディー・イン・ブルー」（ガーシュイン作曲）を指揮した。

平成四年（一九九二年）から長野県松本市で毎年夏に開催してきた『サイトウ・キネン・フェスティバル松本』は、平成二十七年（二〇一五年）より、総監督・小澤征爾の名を冠した『ゼিজ・オザワ松本フェスティバル』と名を改め、新たなスタートを切った。

小澤征爾さんは昭和十年（一九三五年）九月一日、歯科医の父・小澤開作と（三十八歳）、母・さくら（二十八歳）の三男として、旧満州国奉天（現・中国瀋陽）に生まれる。長兄・克己（昭和三年三月生まれの七歳）と、次兄・俊夫（昭和五年四月生まれの五歳）に次ぐ男子。板垣征四郎（陸軍大将、のち陸相）と石原莞爾（関東軍参謀）から一字ずつ取って「征爾」と名付けられた。昭和十二年（一九三七年）十月、二つ違いの弟・幹雄が誕生。四人兄弟となった。

◆小澤家は代々火消しの組頭を務める家柄だったが、父が財産を潰し、開作は手っ取り早く金になるものとして歯科医の免許を独学で修得した。満洲に渡り、奉天で開業する。次第に「満洲建

国」や「日支共和」といった民間人の政治思想運動にのめり込んでいく（『小澤征爾大研究』十ページ（春秋社 一九九〇年）による）。

小澤征爾著『おわらない音楽 私の履歴書』（日本経済新聞出版社 二〇一四年）には次のように書いてあります。

……おふくろによれば、出生の知らせを聞いた時に、ちょうど二人（板垣征四郎と石原莞爾）と一緒にいたらしい。子供の頃は漢字が書けなくてよく「征雨」と間違えたものだ。

日曜日になるとクリスチャンのおふくろに連れられて教会で讚美歌を歌う。家でもみんなで合唱だ。五歳のクリスマスの日、おふくろが大雪の中、大通りの王府井^{ワンフーヂン}まで行き、アコーディオンを買って来た。克己兄貴はみるみるうちに上達し、僕らの合唱の伴奏をするようになった。僕の音楽との出会いだ。

昭和十六年（一九四一年）五月、日中関係の悪化やそのほか長兄の中学入学などもあって、父を北京に残し、一家で日本に帰国した。持ち帰ったのは（着替え）と（中国の火鍋^{ホーゴット}子という鍋）と（家族のアルバム）、それから（アコーディオン）もあった。僕が生まれて初めて触った楽器だ。船で神戸港に着いた後、列車に乗って東京に向かった。住まいは東京都立川市柴崎町三丁目。

若草幼稚園に一年間通った後、昭和十七年（一九四二年）四月、柴崎小学校（当時は立川国民学校）に入学。学校ではどうかすると中国語が出て悪ガキどもにからかわれた。頭に来て黙って

いたら中国語はすっかり忘れてしまった（征爾は六歳まで奉天と北京で暮らした）。

北京に一人残ったおやじは「華北評論」の刊行を続ける。「小澤公館」の看板を掲げた家には従軍記者の小林秀雄や林房雄も訪れたらしい。次第に軍の圧力は強まり、昭和十八年（一九四三年）、おやじは追放されるように日本に帰って来た。昭和二十年（一九四五年）八月六日、広島に原子爆弾が落ちた。九日、長崎にも原爆が落とされた。十五日、敗戦。玉音放送を家族で聞いた。

戦時中、克己兄貴にアコーディオンを教わっていた僕は、だんだん物足りなくなつた。ある日、小学校の担任の先生が講堂で弾いているのをじーっと見ていると、「触ってもいいよ」と言われ、初めてピアノに触れた。小学校四年生の終わり頃だつた。最初の教則本「バイエル」を僕に手ほどきしたのは克己兄貴だと思ふ。旧制府立二中（現・都立立川高校）に通っていた兄貴も同じ頃に音楽に目覚め、音楽の先生にピアノを習い始めていたのだ。僕も連れられ、二中でピアノを練習するようになった。

おやじが方々ツテを探し、横浜・白楽の親類のアップライトピアノを譲ってもらえる話がまともまつた。値段は確か三千元。うちには余裕がなかったから、おやじが北京で買って愛用していたカメラのライカを売って工面したのだつた。どうやって持つて来るかが問題だ。兄貴たちがリヤカーを引いて立川の家から横浜まで行き、ピアノを運んできた。道中、農家にピアノを一晩預けたり、親戚の家に泊めてもらつたりして、三日もかかった。心配になつたおやじが後から追いかけたくらいだから、ずいぶん重労働だつたはずだ。

そうやって届いたピアノの蓋を開けて、ド・ミ・ソと鳴らした時、なんてきれいな音なんだろう

うとドキドキした。五年生の秋には学芸会でベートーヴェンの『エリーゼのために』を弾く。初めて人前で演奏した。……

昭和二十二年（一九四七年）四月、神奈川県足柄上郡金田村金手（現・大井町金手）に転居し、金田村立金田小学校六年に転入した。丸刈りの記念写真があります。とても神経質で、細かい感じです。同級生の子どものほとんどは農家の子でした。

長兄・克己と次兄・俊夫が参加していた混声合唱団「シグナス」（現在も小田原市にある）の指揮者・石黒先生の夫人にピアノを教わった。

◆一家は、立川の家を二束三文で売払い、金田村へ百姓をするために移り住んだ。その間、父は友人の誘いを受けてミシン会社に出資し失敗するなどといった具合で、アツという間に無一文になった。後に征爾と四男の幹雄が成城中学に通うようになって、授業料が払えず何度も督促を受けたという。困った時でもピアノだけは手放さなかった。まず、長男の克己がピアノを弾き始めた。いたずら半分に征爾に教えるとみるみる克己を追い抜いて上達してしまった。町のピアノ教師につけたが、すぐに自分の手には負えないから東京の先生につかせた方がいい、という程になった（『小澤征爾大研究』十二ページによる）。

……（戦後）おやじは歯医者に戻ればいいものを「長いことやっていないからもう忘れた」と言って、商売を始めてはことごとく失敗した。僕が小学校六年生の時にはミシン製造の会社を始

めると言うので、立川の家を売り払い、金田村へ移る。小田原の近くだ。わらぶき屋根の古い農家に住み、おふくろが慣れない百姓仕事で米を作って育ち盛りの四人の息子を食わせた。

中学に入学する段になって、慣れない農村の学校よりは私学の方が良からうということになった。家から二時間半もかかったが、おふくろが成城学園に決めた。入学は昭和二十三年（一九四八年）四月、知り合いのツテでピアノの豊増昇先生とよますのぼるに弟子入りしたのもその頃だ。レッスン料は無料にしてくれた。……

◆昭和二十三年、成城学園中学校に進む。貧しい中で私立中学に進ませたのは、土地の中学の風紀があまりにひどかったからだ。成城か玉川かと迷ったが、結局、成城に落ち着いた。これは偶然としか言いようがないが、その偶然がどれほど征爾に影響を与えたかはかり知れない。

成城でのあだ名は、「ガマ平」。小田原の言葉なまりがあつて、いかにも田んぼの「ガマ平」という名がピタリだったそうだ。しかし、だからといってバカにされるといふことはなかった。成城は何より自由だった。征爾は、自分をそのまま伸ばすことができた（『小澤征爾大研究』十三ページによる）。

◆豊増昇は、東京音楽学校（現・東京藝大）卒業後、ドイツに留学。帰国後は東京音楽学校教授を務めた。園田高弘、館野泉たかのいづみの師でもある。

……征爾は、金田村から通学するのがあまりに大変なので、成城の酒井公先生さかいこうのお宅、その後は成城の教会の平出牧師の厚意で二階にも一時下宿し、礼拝でオルガンを弾く代わりにただで住

まわせてもらっていた（この頃の小澤一家は、まだ金田村に住んでいた）。……

◆小田急線の新松田駅から成城学園前まで約二時間半の遠距離通学だったが、連日ラグビーとピアノのレッスンに明け暮れる。夕方ラグビー部の猛練習が終ると、その足でドロコンコのまま世田谷区奥沢の豊増昇先生の家までレッスンに通っていた。金田村に帰りつくのはいつも夜おそくだった（『小澤征爾大研究』一三三―三三五ページによる）。

◆「中学の終り頃にはピアノリストになろうと決心していた。今でも憶えているけどね、ピアノの調律代は高いから、なかなか調律してもらえないわけ。それでもたまには来てもらおうでしょう、調律師に。調律した後のピアノの音のきれいさを今でも憶えているよ」（武満徹・小澤征爾著『音楽』一三〇ページ（新潮文庫 一九八四年）による）。

……中学に入ってラグビーを始め、たちまち夢中になった。おふくろは「ピアノを弾いているんだから指は大切にしないといけない」と言っつて、ラグビーを禁止した。昭和二十五年（一九五〇年）、中学三年になる直前、ラグビーの試合で両手の人さし指を骨折し、顔を蹴られて鼻の口とつながったのが分かった。そのまま救急車で病院に担ぎ込まれ、入院するはめになった。

退院後、豊増先生に「もうピアノは続けられなくなりました」と言っつと、「音楽はやめるのか」。黙っつていたら先生が「『指揮者』と言っつのがあるよ」。初めて聞く職業だつた。指揮者もオーケストラも見た事がかつた。

おふくろが「うちの親戚に指揮者がいるよ」と教えてくれた。おふくろの亡くなつた伯母・お

とらさんの息子がチェロ弾きで、指揮もやるという。名前を齋藤秀雄さいとうひでおとつけた。おふくろに書いてもらった手紙を持って、一人で東京麹町のお宅を訪ね弟子入りを頼んだ。……

◆齋藤秀雄は、戦前ドイツに留学してチェロを学んだ。帰国後、新交響楽団の首席奏者を務める一方、指揮もした。戦後は一転、教育に心血を注ぐ。東京・市ヶ谷に「子供のための音楽教室」を作り、基礎から音楽を教えていた。

◆おとらさん（齋藤トラ）は、齋藤秀雄の母親である。征爾の母（さくら）とは伯母・姪の間柄になる。しかも、さくらはクリスチャンとしての洗礼を長老だったトラの手で施ほどこされている。トラに大いに見込まれたのだ。征爾は齋藤が親類だとわかると、やみくもに齋藤の家に走り込んだのでトラが何者であるかよく知らなかったのだ（『小澤征爾大研究』十五ページによる）。

◆齋藤は、一年後に創設する桐朋学園音楽科に入るよう勧めて下さったが、それまで市ヶ谷の家政学院にある「子供のための音楽教室」に入ってソルフエージュなどの基礎を勉強しておくようにアドバイスしてくれた。征爾は、おとらおばさんとやらのことを、おふくろがよく話していたのを思い出し、「親類に、おとらさんという人がいるそうですが、先生知っていますか？」と言うと、「ああ、知っている。オレのおふくろだ」と、すまして答えたという（『小澤征爾大研究』二二六ページによる）。

◆「僕は先生の弟子というより近かったわけです。親類だったからね。一緒にしよっちゅうくつっていたしね」（武満徹・小澤征爾著『音楽』一三〇ページによる）。

……齋藤秀雄先生から、「一年後に桐朋学園の音楽高校というのを作るから、そこに入りなさい」と言われた。今度は普通高校の桐朋学園女子高校の中に音楽科を新設すると言うのです。まず、成城学園の高校に進学して一年待つことにした。その間に柴田南雄先生に作曲を、聴音を小林福子先生に習った。指揮は齋藤先生の弟子の山本直純やまもとなおすみさんに基礎を教わり、月に二度ほど齋藤先生に見てもらった。うちはその頃、金田村から引越していた。世田谷区代田の貸家に移ったものの、家賃が払えなくなつて東京農大の校舎に住み着いた。おやじの知り合いに農大の関係者がいて、空き教室を使わせてくれたからだ。……

◆山本直純は、東京五反田の至誠病院に生まれる。高校時代から自由学園を借りて毎週日曜に開かれていた齋藤秀雄指揮教室で齋藤に師事。同時期の同門に、小澤征爾、久山恵子、秋山和慶、飯守泰次郎、尾高忠明らがいる。東京藝術大学音楽学部指揮科卒業。

◆征爾は、昭和二十七年成城学園高校を一年で中退して、創設されたばかりの桐朋学園女子高校付属音楽科に一年から入り直した。第一期生として入学、作曲・指揮科は征爾一人。音楽科だけ共学だったが、第一期生の男子は征爾のほか、堀伝さん（ヴァイオリン）、林秀光さん（ピアノ）、村上綜さん（声楽）の四人だけ。この頃は、既に金田村から世田谷区内に移っていた（『小澤征爾大研究』二二六ページによる）。

金田村については、大体このように書いてある。私の家は大井町金手、御殿場線の金手踏切の坂の下にあります。当時、金手の子どもたちが金田小学校に行くには、この踏切を通らないと行

けない。小澤少年も毎日踏切を越えて学校に通ったことでしょう。私の童謡の会には金手在住の人がいますが、小澤さんの事を語る人はいません。わずかに一件、「布製のカバンをタスキ掛けに背負って金田小学校に通う小澤少年を見かけたことがある」と言う人がいただけでした。

私の祖母は、私が小学生でピアノを練習していた頃、「金手にも、ピアノが聞こえて来る家があった」と言っていました。もっと詳しい事を聞いておけばよかったです。小澤さんの一家が暮らしていた家のあった場所を教えてもらいましたが、今は新しい家に建て替えられています。

平成十七年（二〇〇五年）、大井町は町制五十周年を翌年にひかえた時、記念事業として「小澤征爾コンサート」の実現に取り組みました。しかし、旧金田村・金田小学校の同級生や町長が東京上野の東京文化会館で上演中の『東京のオペラの森』の指揮を取るコンサート会場の楽屋に会いに行つて説得しても、来ることはありませんでした。「問題は時間ですね」と呟いたそうです。楽屋では、持参した小学校時代の写真を見てもらい、金手の村祭りでバチを握った太鼓の話になり、「テンテコ・マツツアン」と太鼓を叩く仕草をしたそうです。小澤さんは、金手に住んでいた頃の事を鮮明に覚えていた。金手のお祭りの太鼓は、「テンテコ・マツツアン、テコマツツアン」と叩く。

ところで、町の代表者たちは、今聴いたコンサートの感想を、小澤さんにどのように伝えたのでしょうか。

◆平成十七年、音楽祭『東京のオペラの森』がスタートし、『エレクトラ』（R・シュトラウス作曲）を指揮。

◆大井町は、昭和三十一年（一九五六年）四月一日、金田村と相和村、曾我村の上大井、西大井地区の二村二地区が合併し誕生、平成十八年四月一日に町制施行五十周年を迎えた。

平成三十年（二〇一八年）一月十二日、NHKテレビ『あさイチ』プレミアムトークに小澤征爾さんが出演された。現在八十二歳。

「小田急の新松田の金田村の中学校に行くはずが、成城学園に行かせてくれた。成城に行つてなければ音楽はやっていなかった。……田舎もよかったですよ。田植えをやった。ミカン狩りもした。あのあたりでは、今でもやっているんじゃないかな」。

この発言は、東京に引越して以来、一度も大井町金手を訪れていないことがわかる。小澤さんは、今も話す時、早口の小田原弁です。小田原弁はきれいな方言ではない。ピアノをリヤカーで運んだ話も出た。今年（平成三十年）、三月の小澤塾のオペラの演目は、歌劇『ジャンニ・スキッキ』（プッチーニ作曲）、『こどもと魔法』（ラヴェル作曲）の予定。私はファンの一人として、これからも元気で活躍されることを願っています。

「音楽家は、美しい音を聴く人に与えるのが仕事だ。みんなそう思っている。僕もそう思つてやってきたが、この年になると、知っている戦争のことを話さなければいけないと思う。若い人たちに戦争の悲惨さ、平和の中で音楽ができることのすばらしさを伝えなければと思うようになって

きた」(小澤征爾の言葉)。

武満徹の音楽

世界的に活躍した日本人作曲家、武満徹が亡くなって二十年になる。武満が、とても愛した楽器の一つがギターだった。

平成二十八年十月二日、『題名のない音楽会』で武満徹の特集が放送された。

〔楽曲〕

・「小さな空」作曲：武満徹、ギター演奏：渡辺香津美、ギター演奏：鈴木大介。かわいい曲で、すがすがしい。

・「ヘイ・ジュード」作曲：J・レノン、P・マッカートニー、編曲：武満徹、ギター：鈴木大介。武満徹はビートルズが大好き。

・「どですかでん」作曲：武満徹、ギター：渡辺香津美、ギター：鈴木大介。

・「死んだ男の残したものは」作詞：谷川俊太郎、作曲：武満徹、歌：藤木大地、ギター伴奏：鈴木大介。

◆谷川俊太郎は、昭和六年(一九三二年)東京生まれ。詩人。昭和三十七年(一九六二年)「月火水木金土日の歌」で第四回日本レコード大賞作詞賞した。谷川俊太郎と武満徹は親友だった。

「世界の武満。と言われているなんて、信じられない。そうなんですかという感じですよ」と語った。

◆鈴木大介は、作曲家の武満徹から「今までに聴いたことがないようなギタリスト」と評されて以後、新しい世代の音楽家として常に注目され続けている。マリア・カナルス国際音楽コンクール第三位、アレツサンドリア市国際ギター・コンクール優勝など数々のコンクールで受賞。洗足学園音楽大学客員教授。横浜生まれ。

◆藤木大地は、カウンターテナー。ウィーン在住。二〇一二年日本音楽コンクール声楽部門第一位。美しい声です。

平成二十八年八月二十七日、『ららクラシック』でも、武満が世界的に有名な歌をギター用にアレンジした作品集を取り上げた。

「ギターのための12の歌」は、日本の童謡や世界の映画音楽、ジャズの名曲、そしてビートルズの歌など、武満徹が大好きだった歌をギター用にアレンジしたもの。

武満徹がギターの独奏曲を作曲するきっかけは、ギタリストの莊村清志さんとの出会いだった。当時まだ無名だった莊村さんが、自分のコンサート用にオリジナル曲を依頼。その際、武満はアンコール用に映画『オズの魔法使い』の「オーバー・ザ・レインボー」のアレンジ曲も手渡していた。武満は「オーバー・ザ・レインボー」が、とても気に入っていた。莊村清志さんは現在六十八歳になっていた。

放送では鈴木大介さんのギター演奏で「オーバー・ザ・レインボー」（作曲：ハロルド・アーレン）と、「イエスタデイ」（作曲：ポール・マッカートニー／ジョン・レノン）が演奏された。

ポール・マッカートニーが「自分が大学で講義をする時、このアレンジを紹介しているか」と訊ねたそうだ。感動した私は、放送後、早速『武満徹ギター作品集』のCDを買って聴いた。「ロンドンデリーの歌」「オーバー・ザ・レインボー」「サマータイム」「早春賦」「失われた恋」「星の世界」「シークレット」「ヒア・ゼア・アンド・エヴリウェア」「ミッシェル」「ヘイ・ジュード」「イエスタデイ」「インターナショナル」。演奏は鈴木大介。

「星の世界」は、星のきらめきが際だつアレンジ、「ミッシェル」は、胸に響く甘くせつないアレンジになっていて、すばらしい。

私は音楽大学で学んでいる時、先生に「このオペラのアリアは」とか「ベートーヴェンの楽譜のこの部分には、このような和音が使われていて」と言われても、さっぱりわからなかった。すぐ、上野の文化会館にオペラを観に行ったり、レコードや楽譜を買って勉強した。遅れながらもついて行き、やっとのことで卒業した。気がつけば、入学の時より卒業生は激減していた。それぞれの理由で退学、留年者が大勢いた。私は、今でも音楽の勉強を続けている。CDを聴いたり、楽譜や本を読んだり、音楽のテレビ番組を観たり、興味のある事を学ぶのは楽しいものです。

ブルクミュラーの魅力

Eテレ『らららクラシック』で、ピアノのお稽古の定番曲、ブルクミュラーの『25の練習曲』の放送があった。私は、かつて近所の子どもたちにピアノを教えていたので、ブルクミュラーの

『25の練習曲』が、これほどすばらしいものだったのかと再認識した。「ブルクミュラー」とは、本のタイトルだと思われるほど作曲家自身については、ほとんど知られていません。

◆ブルクミュラーは、一八〇六年、南ドイツ・レーゲンスブルク生まれ。両親から音楽を学び、二十六歳でパリへと渡ります。当時はリストやショパンが大人気で、ピアノ文化が花盛りの時代。そして一般家庭にもピアノが普及するようになっていました。そこで人々が求めたのが、初心者でも楽しめるやさしいピアノ曲集と、それを教えてくれる指導者でした。ブルクミュラーはそんな当時の音楽事情に後押しされ、ピアノ教師という職を得たのです。真面目で熱心な仕事ぶりから、次第に人気教師となり、ついにはフランス国王の子どもにもピアノを教えるまでに。そして初心者へのレッスンを重ねる内に、上達するための方法を考えるようになります。そして四十五歳で出版したのが『25の練習曲』。たとえ初心者でも、おしゃれな曲を弾くことができる人気になり、長く愛される作品となった。

初心者向けの教則本の中でも、ブルクミュラーの練習曲は、音の強弱や速度を示す演奏記号がとりわけ多く使われています。譜面に指示された記号をしっかり表現すれば、初心者でもリストやショパンになった気分を味わえます。『18の練習曲』や『12の練習曲』は上級用です。

今回のピアノ演奏者は佐藤卓史さん、第七十回日本音楽コンクール第一位。演奏曲はブルクミュラー作曲『25の練習曲』から「アラベスク」、『18の練習曲』から「風の精たち」、『12の練習曲』から「夕べの時」でした。

「アラベスク」がすばらしかった。優れた演奏を聴くと、自分でも弾いてみようと思います。私の童謡の会では、「アラベスク」の伴奏に乗せて童謡「黄金虫」（作詞・野口雨情、作曲・中山晋平作曲）を歌っています。

民謡を楽しむ

平成二十八年十一月十三日、三十五周年記念発表会「米若会」を聴きに行った。民謡のコンサートは、初めてで緊張した。入場無料なのに、受付で立派なプログラムをいただいた。松田町民文化センター大ホールは、午前十一時の開演から午後四時の終演まで満席でした。その間、休憩は十分だけ。

会場を埋め尽くした客は、二、三人で連れ立って来ているので、隣同士で話をしている。楽しそうだ。幕が上がっても話し続けている。

会員の唄が始まった。一人一曲ずつ二番まで唄う。ピアノの発表会のようだ。最初の人は「ひえつき節」、一人の歌い手に対し、合いの手を入れる（唄ばやし）が二人と、三味線の人が四人、尺八の人が四人、鳴物（太鼓や鐘）の人が二人いる。鳴物の人は指揮者の役目で、全曲暗記している。おおよそのテンポを決めたり、終わりの合図を送ったりする。

「武田節」「南部牛追唄」「箱根馬子唄」「秋田節」「おてもやん」「お江戸日本橋」「佐渡おけさ」……唄い手が変わるとに伴奏の三味線と尺八の伴奏者がめまぐるしく交代した。

驚いた事に、ステージで唄っている人がいるのに、会場では楽しくおしゃべりが続いている。そのため、ステージはマイクのポリウムが全開になっている。耳が痛い。クラシックのコンサートでは、ステージの演奏を静かに聴く。隣りの人とは話をしない。演奏に聴き入る。常識だ。これは一体何だろう。

さらに驚いた事に、客は知っている曲があると一緒に唄う。一緒に唄ってしまうとステージで唄っている人の声を聞くことができない。

尺八の演奏があった。六人の合奏。「椰子の実」「刈干切唄」「旅愁」編曲がおもしろかった。しかし、客は尺八の音を聴くどころか気持ちよく大きな声で歌った。司会者が「歌も入って、よかったですねえ、ありがとうございます」と言った。私は、「民謡は、こうして楽しむものなのか」と思った。四時近くになって、やっと特別出演の原田直之さんの唄になった。「新相馬節」は、昔と変わらない好い声で聴かせた。姿勢がいい。唄う時は姿勢が良くなければいけないと確信した。私は、童謡の会の指導の時、「姿勢を良くしてください」と言うようにしている。

続いて「大漁唄い込み」唄と華やかな踊りが披露された。三曲目は「花は咲く」東日本復興支援ソングが民謡調になっていた。フィナーレは、特別出演者全員で「花笠音頭」を唄い締めくくられた。客は、口々に「よかったわねえ」と満足し、民謡を楽しんで笑顔で家路についた。

◆原田直之さんは、福島県双葉郡浪江町出身。福島県立双葉高等学校卒業。昭和三十五年（一九六〇年）『NHKのど自慢』の民謡部門福島県代表となる。昭和五十三年（一九七八年）、NHKの『民謡をあなたに』に出演。金沢明子さんと活躍。平成二十三年（二〇一一年）故郷である浪江町が、

東北地方太平洋沖地震並びに福島第一原子力発電所事故に襲われた。日本放送協会による「花は咲く」プロジェクトに参加し、東北復興に尽力している。『NHKみんなのうた』で「こきりこの歌」、富山県民謡（編曲…三枝成章）を歌い、透きとおった良く響く声で人々を魅了した。

クラシックを楽しむ

平成二十七年（二〇一五年）十一月十五日、小田原市民会館大ホールで、小田原フィルハーモニー交響楽団第一二回定期演奏会、天満敦子（てんまのぶこ）さんを迎えてストラディバリウスで奏でるメンデルスゾーン「ヴァイオリン協奏曲ホ短調作品六四」を聴いた。指揮・三河正典。

観客はヴァイオリンの深い響きに涙した。音が泣かせた。右前の席の男性は手で涙をぬぐった。さらに隣の席の男性も手で涙をぬぐっていたが、たまらずボンのポケットから黒いハンカチを出して涙をぬぐった。号泣になった。小田原フィルも負けていなかった。好い演奏だった。

アンコールは、童謡「月の沙漠」だった。演奏者の訴えるものが伝わって来た。静かに聴き入り、感動の時が流れた。今でも心に残っています。

「父方も母方も、だれも音楽家はいません。私だけです」天満敦子。

◆天満敦子さんのヴァイオリンは、アントニオ・ストラディバリ（弦楽器製作者）晩年の名作。弓は伝説の巨匠ウージェーヌ・イザイ遺愛の名弓。

童謡の会の「おしゃべり」

民謡のコンサートとクラシックのコンサートとは、これだけ楽しみ方が違う。会場に足を運ぶ人にも違いがある。年齢も関係しているかも知れない。

ある日、真鶴の童謡の会員が、「後ろの方の人が、ずっとしゃべっていて先生の話が聞こえない」と言ってきた。私は「前の方の席が空いていますから、前の方にどうぞ」と言ったのを思い出した。童謡の会でも、隣同士楽しくおしゃべりをしていただくと事情がわかった。

美川憲一の「おだまり！」

平成二十八年十二月七日、NHKテレビ『スタジオパークから こんにちは』に歌手の美川憲一さんが出演した。「私のトレードマークの『おだまり！』という言葉は、私が歌っているのに、しゃべっている人がいるのよ。それで、『うるさい！』って言おうとしたけど、それじゃあ、ステージにあがって来てぶんなぐられるかもしれないでしょう。だから『おだまり！』って言ったの。言ってから会場を見たら、みんなが笑ってるじゃあない。これっていけるかとも思って、それから女言葉を使うようになったのよ」「なんだかんだあったけど、もう七十歳よ。『柳ヶ瀬ブルース』のヒットは五十年も前よ」「なるほどそうだったのか」。

真理ヨシコの「歌の力」

平成二十九年五月十九日、JR東海道線の車内で名古屋から来たという品の好い夫人と話をし

た。藤沢で江ノ電に乗り換えて、娘さんの家に行き、明日孫の運動会を見に行くとのことだった。『読む、歌う 童謡・唱歌の歌詞』をプレゼントすると、「童謡のコンサートで、真理ヨシコさんの歌を聴いた事があります。美しい声でした。今でも覚えています。それまでザワザワしていた会場が、真理ヨシコさんが歌い出すとピタッと静まり返ったんですよ。だれも静かにしなさいなんて言わなくても。歌の力ってすごいですね」と言った。私から歌の本を受け取ったその人は、嬉しそうに手をふった。「また、どこかで、いつか、お会いしましょう」と私は言った。しばらくして、絵手紙で歌の本のお礼状が来た。

『題名のない音楽会』へようこそ

若い演奏家に期待

平成二十九年一月十五日、『題名のない音楽会』を観る。テーマは「難しいピアノ曲を弾く音楽家たち」。ピアノ演奏者は福間洸太郎さんと森下唯さん。いとも簡単に難曲を弾いた。福間さんはストラヴィンスキー作曲、アゴステイ編曲の「火の鳥」より「凶悪の踊り」を弾いた。森下さんはアルカンの「鉄道」を演奏。司会は五嶋龍さん。若い演奏家に期待したい。

ラン・ランおおいに語る

平成二十九年二月五日、『題名のない音楽会』を観る。番組二五〇〇回記念「ピアノ界のスーパー

スター ラン・ランと音楽家たち」。司会は五嶋龍。ゲストはラン・ラン。

〔演奏曲〕

- ・ ガーシュイン「ラプソディ・イン・ブルー」
- ・ ショパン「スケルツォ 第二番」
- ・ ファリャ「恋は魔法使い」より「火祭の踊り」

ラン・ランが、幼少期の体験やピアニストになるまでの思い出を語った。どれも興味深いものばかり。

少年時代から厳しい練習を積んできたラン・ランのようなピアニストでも、マンガやアニメが大好きな普通の子どもと同じ側面を持っていた。「トムとジェリー」の演奏シーンにすっかり魅了されて音楽が好きになったという。ラン・ランは、自伝でこんなふう述べている。

「ピアノを弾くと、僕はただの少年ではなく、特別な何かになった。孫悟空やトランスフォーマーやトムとジェリーのように、ピアノは僕をもっと幸福な世界へと連れて行ってくれた」（『奇跡のピアニスト郎朗^{ララン} 自伝^{ララン}より）。

母親の仕送りだけでは、仕事をやめた父親との都会生活はできず、次々コンクールに出て、賞金で生計をたてるようになった。中国で「勝利第一主義」を植え付けられたラン・ランは、アメリカに渡って価値観の転換を迫られます。奨学金で入学したカーティス音楽院の名教師ゲイリー・グラフマンは、「すべてのコンクールを制覇したい」と語るラン・ランに対して、「もうコンクー

ルに出場する必要がない」と諭す。音楽はスポーツ競技のような順位を争うものではなく、人々を心を通い合わせる詩のようなもの。そう教えるグラフィマンとの出会いが、音楽家ラン・ランの重要な第一歩を後押しした。

次いで、ピアニストで指揮者のエッシェンバッハとの出会いもラン・ランに大きな影響を与えた。エッシェンバッハからラヴィニア音楽祭のオーデイションに招かれたラン・ランは、求められるまま次々と演奏を続け、当初二十分間の約束が二時間にもなってしまったという。時を忘れてラン・ランの演奏に耳を傾ける名匠エッシェンバッハ。想像するだけでも、すごい場面。短い映像でしたがエッシェンバッハの今を観ることができました。

◆ラン・ラン Lang Lang [中国語：朗朗] は、昭和五十七年（一九八二年）六月十四日生まれ、中国遼寧省瀋陽出身のピアニスト。父親の郎国任は満族出身で、中国空軍瀋陽部隊歌舞団の二胡奏者だった。父親は、子どもたち全員に楽器を習わせた。

◆平成二十九年一月スタートの大河ドラマ『おんな城主 直虎』のテーマ音楽（作曲：菅野よう子）のソリストはラン・ラン。また、本編の後の『大河ドラマ紀行』の演奏は、ヴァイオリニスト、五嶋みどりが担当している。

ゲストのユージさんが泣かせた

平成二十九年二月四日の『さらさらクラシック』は、スコット・ジョプリンの「エンターテイナー」。

司会は、作家の石田衣良さんと作曲家の加羽沢美濃さん。ピアノ演奏は中野翔太さん。ゲストはタレントのユージさん。

ジョプリンの「エンターテイナー」が一躍注目を集めるきっかけとなったのが昭和四十八年（一九七三年）のアメリカ映画『ステイキング』。軽快でリズムミカルな音楽がピタリとはまり、大人気の曲となった。

作曲家ジョプリンが得意としたのは、ラグタイムと呼ばれる大衆音楽。十九世紀から二十世紀はじめにかけて流行し、歓楽街の酒場などで、黒人のピアノニストたちが盛んに演奏していた。ラグタイムの名の由来は、「規則正しい拍子をくずすから」とか、「ぼろきれを身にまとった人が弾いていたから」など、諸説あり。

「エンターテイナー」は、そんなラグタイムの代表作。踊り出したくなるような躍動感、何度も聴きたくなるその親しみやすさは、酒場に集まる人々を大いに熱狂させたといえます。近年は、クラシックの著名な演奏家たちも好んで取り上げ、誰もが知る名曲となった。

一八六〇年代に奴隷解放令が出されたものの、アフリカ系アメリカ人たちは依然として、白人からの差別に苦しんでいた。そんな時代に音楽好きの家庭に生まれたジョプリンは、幼い頃からピアノに親しみ、白人の教師からクラシック音楽の手解きを受けた。やがて彼は、酒場で演奏するピアノニストになり、一八九九年、初めてのラグタイムの作品を出版。しかし、その表紙は「ジョプリンが集めたぼろきれのような音楽」と銘打った屈辱的な表紙でした。めげることなく作曲を続けた彼は、「メイプル・リーフ・ラグ」という空前のヒット作を生み出しラグタイム王と呼ば

れるようになった。以後も名作を続々と発表する中で「エンターテイナー」が誕生した。

しかし、白人たちからは、「ラグはしよせん黒人の音楽」と、さげすまれていた。ジョプリン は、さらに本格的なクラシック音楽の作曲にも取り組み、一九一一年、歌劇「トゥリーモニシヤ」を発表。それでも、黒人蔑視の風潮はやむことがなく、オペラの上演は失敗。精神を病んだジョプリンは、志なかばの四十八歳でこの世を去ります。ジャズの流行と共に、ジョプリンのラグタイムは忘れ去られていった。再び彼の音楽に光が当てられたのは、死後、半世紀以上を経た一九七〇年代。「エンターテイナー」の大ヒットとともに、ジョプリンの音楽は改めて見直された。

「エンターテイナー」の親しみやすさは、どんな工夫から生まれるのか。第一のポイントは、シンプルな旋律。冒頭のイントロは、左手と右手が一オクターブ離れています。殆ど同じような旋律の繰り返し。その後の主題も四小節で完結するようなコンパクトな旋律。

第二のポイントは、左手と右手のズレ。左手のリズム、「タンタン」に対して、右手は、「ンタ」になっている。「春が来た」などの身近な曲を、左手と右手のタイミングをずらして弾くと、ラグタイムのようなノリが出てくることが実感出来ると作曲家の加羽沢美濃さんが説明し、実演した。すばらしい。

「エンターテイナー」は、シンプルで覚えやすいメロディー、そして、左手と右手のズレから生まれるノリのよさが、聴く人の心を捉えている。

今回のゲストはタレントのユージさん。父はアメリカ人、母は日本人。「五歳の時、母親と日

本に來た。英語しか話せなかった。容姿がこんななので、小学校に入学するといじめられた」。司会の石田衣良さんが訊ねた「背は高かったのではないですか」「僕は小さくて、前から二番目でした」。

「どうやって克服して行つたのですか」「十九歳の時、アメリカに行つて、それまで一度も会わなかつた父親に会うことができました。いとこも、いっぱいいました。僕はアメリカにも日本にも故郷がある。こんなに沢山の人が僕の周りにいる。他の人より二倍も幸せと気がつきました」「それは好かつたですね」。

私は、感動して泣きそうになつた。この番組のすばらしい所です。クラシックの曲だけにこだわっている人には、わからないでしょう。

ユージさんは、幼い頃ピアノを習つていた。得意は「エリーゼのために」。「エンターテイナー」は、「どこか切なさを感じる。僕っぽい。弾けたらカッコいいな」と言つた。

私と一緒に観ていた夫も「僕も弾いてみたいな」と言つた。この番組は音楽を好きにします。

◆Eテレ『らららクラシック』は、平成二十九年三月二十五日の総集編を最後に、司会の加羽沢美濃さんと石田衣良さんが卒業した。総集編アンコールでは、たくさんのお名曲の中から「剣の舞」が選ばれていた。「剣の舞」の解説は、みごとだった。

感動の「ノヴェンバー・ステップス」

Eテレ『ららクラシック』の司会は、四月から俳優の高橋克典さんになった。平成二十九年五月十二日Eテレ夜九時三十分放送は、武満徹作曲の「ノヴェンバー・ステップス」だった。

「ノヴェンバー・ステップス」は、オーケストラと日本の尺八・琵琶による斬新な曲。五十年前、アメリカ・ニューヨークで初演された。初演のきっかけを作ったのは、指揮者の小澤征爾さん。当時ニューヨーク・フィルの副指揮者だった小澤は、楽団百二十五周年を記念し世界の作曲家に曲を委嘱する中、日本人作曲家の選考を任された。そこで伝統の和楽器を使って作曲が出来る武満さんを推薦した。

初めての海外からのオーダーに武満は大喜びで引き受けた。ところが曲を書き始めると徹底した合理主義の洋楽、西洋ではノイズとされる倍音などを持ち味とする邦楽、西洋と日本の音楽性の違いに悩み、行き詰まっていく。窮地を救ったのは、滞在中の山里に鳴り響いていた村の有線放送だった。風や鳥のさえずり、決してお互いを損ない合う事なく響きあう自然の音と放送の音。そうした環境音を聴くことで、それぞれが独自に存在しながら共存もする、これまでに無い新たな発想の協奏曲を完成させた。

武満は「オーケストラに対して、日本の伝統楽器をいかにも自然にブレンドすることが、作曲家のメチエ（技巧）であってはならない。むしろ、琵琶と尺八がさししめす異質の音の領土を、オーケストラに對置することで際立たせるべきなのである」「特別の旋律的テーマを持たない十一のステップ。能楽のようにたえず揺れ動く拍」という言葉を残している。

昭和四十二年（一九六七年）秋、武満はアメリカへと渡る。「ニューヨーク・フィルの連中は、

気位が高く、特に現代曲には「つらくあたる」との前評判。心配はリハーサルの初日、見事に的中する。琵琶・尺八を演奏する名人二人が羽織袴の正装で、深々とお辞儀をしたその時、オーケストラのメンバーが笑い出した。小澤は怒った。「日本の音楽が笑われた、武満が馬鹿にされた。このコンサートは絶対に成功させなければならぬ」小澤の意気込みはオーケストラのメンバーにも伝わった。コンサートは成功し、武満徹の名を世界に示した。

尺八の横山勝也さんは「本当に命がけでした」と当時を語る。若き音楽家たちの未来、名人が背負う数百年の伝統、日本音楽界のこれまでと、これから、その真価が問われる初演だった。西洋音楽のオーケストラに対して、独奏する尺八と琵琶。

武満は「洋楽の音は水平に歩行する。だが、尺八の音は垂直に樹のように起こる。尺八の名人が、その演奏のうえで望む至上の音は、風が古びた竹藪を吹きぬけていくときに鳴らす音であることを、あなたは知っていますか？」と言っている。

『らららクラシック』のスタジオでは楽譜を題材に作曲家・青島広志さんが解説した。わかりやすい解説だった。西洋音楽では排除される「雑音（ノイズ）」に注目し、武満が目指した曲の本質を垣間見た。そこから浮かびあがるのは、日本の伝統楽器そのものが持つ魅力を損なうことなく、オーケストラを伴奏・背景として描いたということ。琵琶・尺八の生演奏も交えて、武満が求めた音色を紹介した。

この日放送に使われた演奏は、「ノヴェンバー・ステップス」から抜粋、武満徹（作曲）、シャ

ルル・デウトワ（指揮）、柿堺香（尺八）、中村鶴城（琵琶）、NHK交響楽団（管弦楽）、ザルツブルク音楽祭二〇一三（フェルゼンライトシユール／オーストリア）。

私が一番感動したのは、琵琶の演奏部分だった。琵琶は打楽器のように使われている。琵琶の演奏は何度か聞いていたが、その演奏は新しかった。琵琶の鶴田錦史さんによれば、「作曲家武満によって開拓された多くの新しい技法も用いられている」という。やはりそうだったのか。私は自分の感想に興奮した。

すばらしかったので、再放送を、童謡の会員と尺八を習って一年目という人に連絡をした。再放送も、言葉に言い尽くせないほどの感動があった。

◆「ノヴェンバー・ステップス」は、ニューヨーク・フィルハーモニックの創立一二五周年記念演奏会のための委嘱作品として、一九六七年四月から八月にかけて作曲され、同年十一月九、十、十一、十三日の四日間にわたって、琵琶・鶴田錦史、尺八・横山勝也、小沢征爾指揮のニューヨーク・フィルによって初演された。曲名の「ノヴェンバー・ステップス」は、作曲者の武満徹によって「十一月の階梯」と訳されている。